ゆきが降る土地で、にんげんは、冬眠する暮らしを選んだ。雪に勝つためでも、避けるためでもない。
ゆきが来たら、動きを減らし、そこに、とどまる。ゆきの下は、家でも外でもなく、地面と空気と雪の重さのあいだにある。狭いけれど、落ち着かないわけじゃない。
にんげんは、あたたかさも便利さも、必要以上には求めない。冬は、生き方を小さくする季節だと受け取っていた。

ゆきした にんげん

雪が積もると、
世界は、静かになる。

音はやわらぎ、
動きは減る。

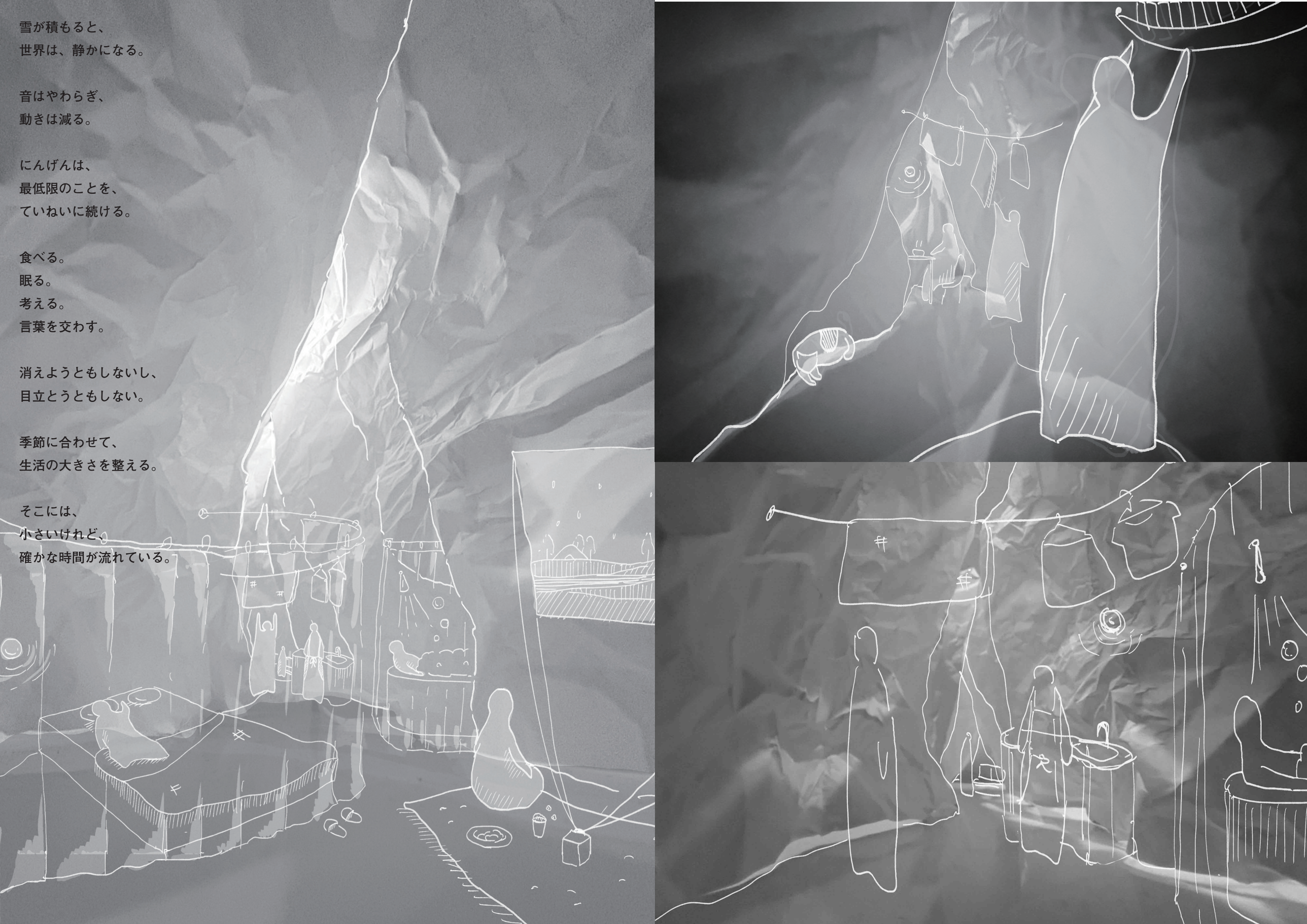
にんげんは、
最低限のことを、
ていねいに続ける。

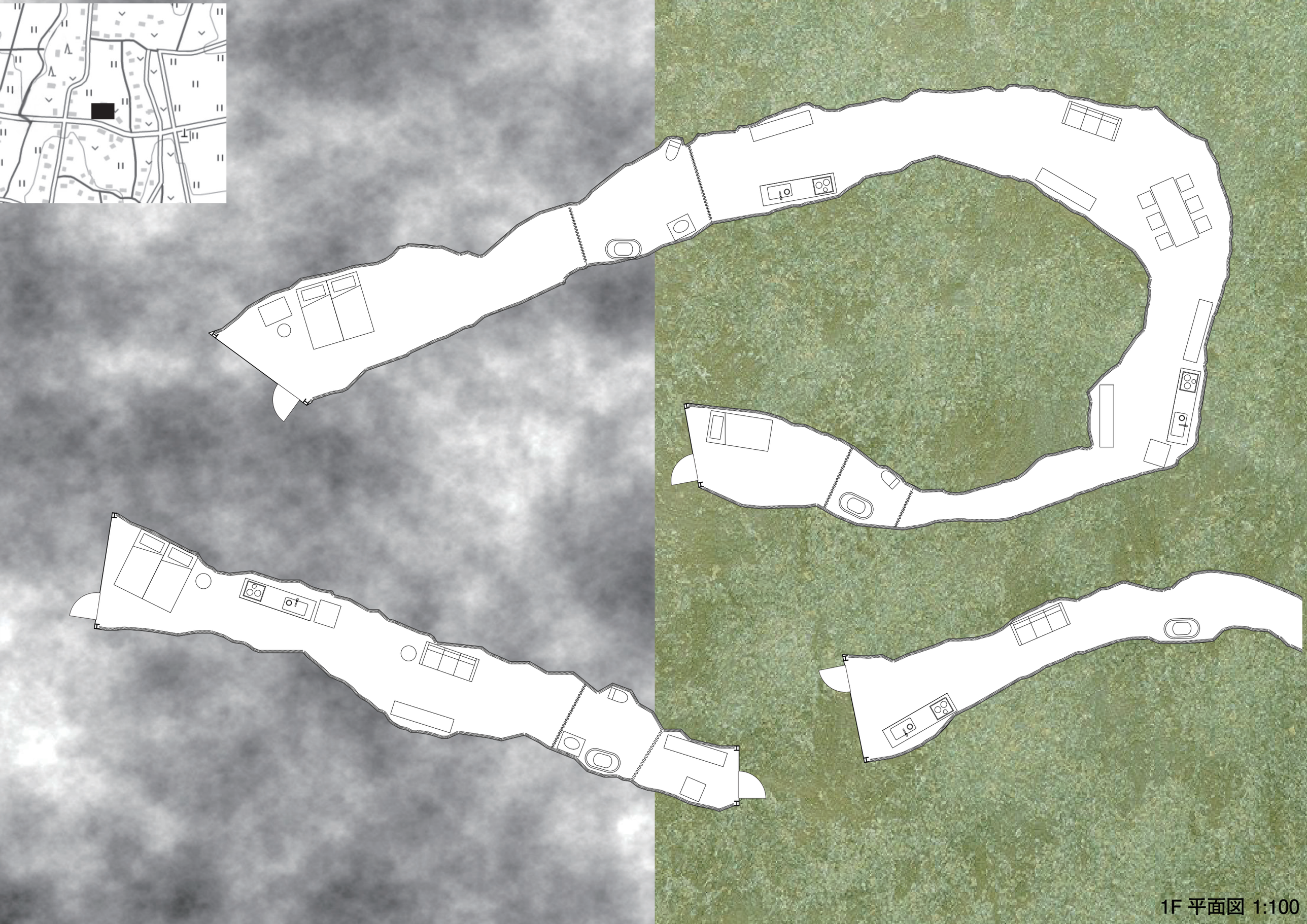
食べる。
眠る。
考える。
言葉を交わす。

消えようともしないし、
目立とうともしない。

季節に合わせて、
生活の大きさを整える。

そこには、
小さいけれど、
確かな時間が流れている。





1F 平面図 1:100

春になると、
雪は、ゆっくり消える。

冬に沈んでいた場所は、
地上に残り、
高い壁のようになる。

使い道は決められない。
説明もしない。

夏になると、
その壁は、少し不思議な存在になる。

風景から浮いて見えるし、
理由もわからない。

それでも、
昼の強い日差しの中で、
人は、その影に入る。

腰を下ろし、
寄りかかり、
しばらく、そこにいる。

冬のために選ばれた形が、
夏には、
思いがけず居場所になる。